

バングラデシュ南部避難民救援事業

大阪赤十字病院 看護師 伊藤 万祐子

2018年1月5日から2月22日の7週間、本事業の第4班の看護師として派遣されました。私達は日本赤十字社(以下日赤)の要員25人、バングラデシュ赤新月社(以下バ赤)要員18人、コミュニティボランティア51人の計94名と、日赤の緊急救援チーム(Emergency Response Unit: ERU) 史上最多のメンバーで活動を行いました。

第3班が避難民キャンプ内に仮設診療所の開業を行っていたため、私達は活動を引き継ぎ、仮設診療所の運営安定化、雨期への備え、スタッフ教育と地域への還元を中心に活動を行いました。その中で看護師の役割は多岐にわたります。私が主に携わった教育グループの活動について報告します。

私達教育グループは、診療所におけるヘルスサービスの向上を目標とし、以下の活動を行いました。

1. 患者ケアの質の向上

現地では、バ赤、日赤、コミュニティボランティア(主に避難民の方々で構成される)とともに活動しました。文化も習慣も超えて、同じ目標に向かって活動を行うために、共通の理念に基づいて活動しているという認識が重要でした。赤十字赤新月社の理念を理解し活動できるよう、活動の歴史、七原則についてバ赤スタッフ、コミュニティボランティアに対して講義を行いました。そして七原則の理念に基づいた行動計画を毎朝仕事開始前のミーティングで発表しました。最初は日赤教育グループが中心となり発表しましたが、バ赤スタッフの全員が理念を理解してくると、今度はバ赤スタッフが主体となり、彼らからコミュニティボランティアに説明していただけるようになりました。最終的にはスタッフ全員に七原則を周知することができ、実際の活動中でも理念に基づいた発言や行動が見られるようになりました。これらの取り組みによって、結果的に患者ケアの質の向上につながったといえます。



日赤による赤十字赤新月社の理念の講義



バ赤による赤十字赤新月社の理念の発表

2. 看護ケアの知識と技術の強化

私達が活動を行っていた仮設診療所と巡回診療所では、それぞれ毎日約 120 人程度の患者が訪れており、時には 180 人を超える日もありました。主な疾患は急性呼吸器症状や下痢症、気温の高い日には脱水の患者でした。結核、ジフテリア、麻疹などの感染症の患者も多くみられました。一緒に活動していたバ赤看護師は看護師としての経験年数が 1、2 年目未満であったため、今後長期化すると予測される支援を、主支援国であるバ赤スタッフに引き継いでいくことを見越して知識や技術面で支援を行う必要がありました。バ赤からの要望とバ赤スタッフの実務の状況から必要性を考えた結果、注射に関する講義と実技講習、トリアージや緊急時の医薬品の使用に関する講義とロールプレイを実施し、マニュアルを作成しました。注射に関する講義では、注射の技術だけではなく、注射に付随するリスク、感染症の知識、適切な準備、標準予防策、6R の確認、カルテの確認と薬剤量の計算方法とダブルチェック、患者への説明や観察、適切な片付け方法まで理解し実施できることが重要です。講義の後は内容を正しく理解しているかの確認と知識定着の意味を込めて実技講習を行いました。講義の後は、チェックリストを用いて、講義の効果があつたかどうか日赤スタッフにより評価を行い、OJT にて引き続き指導を行いました。講義を受けた看護師は概ねマニュアルに沿って実施できるようになっており、この取り組みによる知識、技術の向上がみられました。またマニュアルを使用することで、日赤側もユニバーサルな基準を用いて統一した指導が行えるようになりました。



バ赤看護師への静脈注射の実技講習



バ赤看護師への静脈注射の実践指導

トリアージに関しては、実際の診療の中で、日によって沢山の患者が一度に訪れる日があること、また感染症疑いの患者が適切に他患者と隔離されていないこと、5 月には雨期が訪れ、近い将来感染症の流行やハリケーンの上陸の可能性が高いことからトリアージの必要性を考え講義を実施しました。当診療所におけるトリアージはいわゆる一般的な病院におけるものではなく、当仮設診療所において必要な視点を踏まえ、その目的と具体的な実施方法を提示しました。講義は日赤スタッフだけではなく同じ

く教育グループに所属するバ赤の看護師一人に協力していただき、一緒に準備を行いました。バ赤スタッフとともに行うのが初めてであったため、まず資料作りは日赤看護師で行い、発表を分担しました。バ赤看護師は発表の準備のため自己学習を熱心に行っており、発表も英語とバングラデシュの言語を使うことにより、バ赤スタッフの理解度、関心も高く、熱心に耳を傾けていました。発表を行ったバ赤看護師も教育グループの一員としての自覚が高まり、次回の講義に関して意欲的な発言が聞かれました。講義の後は、日赤スタッフが患者役となり、実際のようにバ赤スタッフにトリアージを実施してもらい、その場でアドバイスや指導を行いました。結果これまでよく見逃されていた結核疑いの患者も適切に隔離されるようになり、また乳幼児の有熱者、肺炎疑いの重症患者は優先して診療してもらうことができ、講義の成果がみられました

全体として、講義だけでなく、毎回ロールプレイを行うことでバ赤スタッフも楽しみながら参加でき、意欲的に学ぶことが出来たと思います。



日赤による緊急時の対応のロールプレイ



トリアージの実践練習を行うバ赤スタッフ

3. マニュアルやチェックリストの作成と改善

日本の医療現場でも共通する部分かと思いますが、人や物などの資源は永遠ではありません。特に今回のように緊急支援においては、一定期間内に多くのスタッフが訪れては入れ替わり、またフェーズが移行するとその規模も変化していきます。人が入れ替わったら終わってしまうようなその場限りの支援ではなく、持続可能性を持った支援を行うことが重要だと考えています。そのため講義やロールプレイを行ったこと、現場で説明した内容は必ずマニュアル化しました。マニュアルを作成することで人が入れ替わったとしても、統一した基準を守ることができます。今回筋肉注射、静脈注射、滅菌器具の消毒方法のマニュアルを作成しました。また講義を行った内容が今後も活用されるよう資料をファイルしました。

4. 診療所内の感染予防

避難民キャンプ内ではその衛生環境の悪さから下肢や上肢に膿瘍を形成し診療所に来られる患者が多く見られました。そのため看護師は1日に何件も創傷処置を行いました。その際に使用されるガーゼやボトル、石鹸、軟膏などを入れるトレイが設置されていなかったため、患者の側に手で持っていき、ベッドの上に直接置いているのをよく見かけました。そのため、医療資機材の整理を行い、トレイや膿盆を設置し医療器具が清潔に使用できるようにしました。使用したトレイや膿盆などの医療器具の消毒に関する統一した基準がなかったため、消毒のマニュアルと標準予防策のマニュアルを作成し、患者間での感染は勿論、医療スタッフへの感染を防ぐことができました。



バ赤看護師と創傷処置を実施



通訳のコミュニティボランティアさんと

終わりにになりましたが、今回私がこの活動に参加し、最も心に強く残っているのはやはり避難民の方々のことです。7週間ともに働き、私達の活動を一生懸命支えてくださったのは避難民であるコミュニティボランティアの方々でした。一緒に仕事をする中で彼らの過酷な状況を知り胸を痛めました。「元の家に戻りたい」「これから先のことを考えると夜も眠れない」そんな言葉も多く聞かれました。この先の見えない状況がいつまで続くのか、未だ先行きは不透明なままです。避難民の方々が安心して暮らせる日が訪れることを願わずにはられません。

今回の活動にあたり、ご協力くださった皆様に感謝いたします。